

⑤ 支川（涸沼川）・涸沼

涸沼川は、城里町^{きなぼた}眞端地先に源を發し、涸沼を経て、那珂川の河口付近で那珂川に合流する延長 64.5km の河川である。那珂川と涸沼の間の区間は、汽水環境が形成され、ヤマトシジミの重要な生息場となっている。

涸沼川では、大貫橋周辺の調査でマハゼ、シモフリシマハゼ、ボラ、コトヒキ、シラウオなどの汽水魚が多く確認されている。

涸沼は、湖面積 9.35km²、湖岸延長 20km、最大水深 6.5m、平均水深 2.1m の湖で、流入河川は大谷川、石川川、涸沼川など7つある。涸沼は汽水湖であり、那珂川を通して侵入したマハゼ、クロダイなどの汽水魚・海産魚や、ヤマトシジミやゴカイなどの汽水性の生物が生息している。



上空から見た涸沼川



マハゼ（ハゼ科）

(写真：稲葉 修氏)



シモフリシマハゼ（ハゼ科）

(写真：稲葉 修氏)



スズメの集団ねぐら

(榊建設環境研究所)



ジョウビタキ（ツグミ科）

(写真：榊建設環境研究所)



オオバン（クイナ科）

(写真：榊日水コン)

図 4-67 涸沼川の生物

涸沼大橋周辺では、猛禽類のオオタカはじめ、カイツブリ、ゴイサギ、オオバンなどの水鳥が生息し、冬季には、カンムリカイツブリやコガモ、キンクロハジロなどのカモ類が多く渡ってくる。これらを狙うオオワシも見られる。周辺のヨシ原では、初夏から秋にかけてオオヨシキリ、セッカ、ツバメ、スズメなどが利用し、冬になるとジョウビタキ、アオジ、オオジュリンなどが採餌にやってくる。また、猛禽類のチュウヒがヨシ原で餌を採っている。

涸沼では、昭和40年代前半までは、水生植物の宝庫として有名で、サンショウモ、オオアカウキクサ、ヒロハノエビモ、ササバモ、リュウノヒゲモ、セキショウモ、クロモなど40種以上の植物が記録されているが、近年は水質環境の悪化により、水生植物相は貧弱になっている。かつて見られた広浦（茨城町）のセキショウモ、イトモや、なぎさの小石に着生する緑藻類のカワアオノリなど、涸沼を特徴づけた種は、現在は少なくなっている。

涸沼沿岸の植物群落は、ヨシ、マコモ、カサスゲが中心であるが、その中にアイアシ、オオクグなど汽水域の種も目立ち、ときに湿地性のノウルシも見られる。



涸沼川のヨシ原（茨城町 6月）



涸沼でかつて見られた
リュウノヒゲモ（ヒルムシロ科）



アイアシ（イネ科）
（写真：安 昌美氏 10月）



オオクグ（カヤツリグサ科）

図 4-68 涸沼川の植物

涸沼では、海魚、汽水魚、淡水魚が見られ、これらは湖内東側の海水の影響を受ける水域と、影響を受けない西側の水域とで異なっている。湖内では、ウナギ、シラウオ、ワカサギ、マハゼなどが漁獲されるほか、クロダイやヨスジシマイサキなどの海魚も確認される。また、サケの遡上や降海型イトヨも見られるが、近年、オオクチバスやカムルチーなどの国外外来種も目立っている。

涸沼のヤマトシジミは、全国的にも有名であり、涸沼沿岸の多くの人々が、生業として営々とシジミ漁を続けてきた。



ワカサギ (サケ科)
(写真：稲葉 修氏)



降海型イトヨ (トゲウオ科)
(写真：稲葉 修氏)



シジミ漁の船



ヤマトシジミ (シジミ科)
(写真：㈱建設環境研究所)

図 4-69 涸沼の生物



(写真：小菅 次男氏)

図 4-70 ヒヌマイトトンボ (イトトンボ科)

成虫も幼虫も汽水域のヨシ原に生息し、大きさは腹長が22mm前後で、雄は黒い体色で胸部に黄緑色の斑が4つある。雌の体色は、始め橙色で後に緑褐色に変化する。

ヒヌマイトトンボは、昭和46年(1971)に茨城町宮前地区のヨシ原で発見され、発見地の涸沼にちなみヒヌマイトトンボと命名された。ヒヌマイトトンボの生息には、潮の干満によりヨシ、マコモなどが適度に浸水したり乾いたりする水生植物群落が必要であるとされている。

涸沼周辺では、池沼や水田などに生息するアオモンイトトンボ、ウチワヤンマ、湿地に生息するムモンチャイロテントウも見られる。